福井市（福井県）

情報発信・観光戦略・再開発 にぎわい創造を目指す多角的コラボ

積極的発信による観光イメージアップ事業

昨年（平成24年）10月20日から開催された「第25回 東京国際映画祭」（六本木）のオープニングに当たり、会場では同映画祭始まって以来（!?）、恐らく初めての光景が展開された。

福井市を主要舞台とする特別招待作品『旅の贈りもの 明日へ』の上映に先立ち、主演の前川清さん、酒井和歌子さん、山田優さん、前田哲監督とともに、何と東村新一・福井市長が、同映画祭オープニングの名物「グリーンカーペット」を堂々と練り歩き、マスコミや観客たちの歓呼の声に迎えられたのだ。

世界最高の権威を誇る米・アカデミー賞授賞式でノミネート作品の主演俳優や監督が会場入りの際に練り歩く「レッドカーペット」を模した「グリーンカーペット」は、国内最大の映画祭「東京国際映画祭」オープニングのまさに華であり名物。国内外から参加したよりすぐりの映画作品の主演俳優や監督が次から次へと登場する中、長身の主演・前川清さんよりさらに背の高い東村市長の堂々たる存在感はひとしきり、会場の話題をさらったと伝えられている。

「そのように華やかな場所に立つのは照れ臭いし、本当は嫌だったんです（笑）。しかし『旅の贈りもの 明日へ』という映画には、福井市から1500万円を出資していますし、ロケ地として市内各所での撮影をお願いした経緯などもあります。少しでも福井市のPRに役立つのであればと、制作側からのお誘いもあったので、思い切って参加させていただきました」

東村市長のその思いは、実際、東京国際映画祭オープニングのニュースとともにかなりの露出度をもって「福井市長登場」と紹介されたことで実ったといえるだろう。

『旅の贈りもの 明日へ』はその後、日本各地で上映され、福井市を中心とする福井県各地の町並みや名勝地をアピールし続けているが、同映画への出資に限らず、近年、さまざまなメディアを活用した福井市の情報発信活動には目を見張るものがある。

その代表格は「交通広告グランプリ2011」（JR東日本企画主催）に輝いた《一乗谷DISCOVERY PROJECT》（以下、一乗谷プロジェクト）だろう。毎年度実施されている交通広告グランプリは、JR東日本管内の列車・電車の車内広告全般、駅施設を使った広告活動全般を対象とするもので、広告関係の賞としてはわが国有数の規模と権威を有している。一乗谷プロジェクトは国内に5カ所しかない「特別史跡・特別名勝・重要文化財」のトリプル指定スポットの一つである一乗谷朝倉氏遺跡を全国発信するための企画だったが、その手法の斬新さがまた際立っていた。

例えばミッドタウン・六本木ヒルズの地下にある都営地下鉄大江戸線・六本木駅、地下1階改札口から地下5階・7階のホームに至るエスカレータースペースは、都内有数の長さと深さを持つものだが、この谷間的スペースをそのまま「一乗谷」に見立て、スペースの壁面に春季34枚、秋季38枚のイメージポスターをそれぞれ貼り巡らしたのだ（そのほか、都内主要7駅にもイメージアップポスターを7組14枚ずつ掲出）。

それらの写真は後に写真集として出版されたほど素晴らしいもので、地下鉄およびミッドタウン・六本木ヒルズ利用者は一昨年の春・秋の2シーズンの期間中、数分間にわたってゆっくり、一乗谷をさまざまな角度から撮影した美しいポスターを眺めながら、普段は無機的な空間でしかない地下鉄構内で、ひとときのタイムスリップ感とともに一乗谷への旅情をかきたてられたことだろう。

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡・朝倉館唐門

市のトップセールスマンとして、グリーンカーペットに立つ東村市長

ユニークなコピーに注目が集まった一乗谷プロジェクトのイメージポスター

まちなか・一乗谷・海岸線をネットした観光戦略

しかもポスターのメインコピーは「なにもない」という実にユニークなもの。一乗谷朝倉氏遺跡はよく知られているように、かつて京都の奥座敷とまで呼ばれるほどの文化を構

風に揺れる清楚な水仙は“冬の越前海岸”のまさに華

東村新一（ひがしむらしんいち）
福井市長

胸に着けているのは「一乗谷プロジェクト」のピンバッジ

築した戦国大名・朝倉氏の城下町（1471～1573年）だった。最盛期には1万人もの人口を誇る当時では全国有数の都市でありながら、織田信長の軍勢によって瞬く間に灰燼（かいじん）に帰した悲劇の都市だ。しかし、都市としてそのまま捨てられた存在になったため、遺構の上には後に田畑ができただけで、それ以上の破壊をされることなく400年以上もの間、眠り続けることとなった。

昭和5年には史跡・名勝指定を受けているものの、その時点においても、今も残る庭園などを除けば、あの火山灰に埋まった古代ローマの都市・ポンペイと同様、中世の都市の遺構が田畑の下で丸ごと息を潜め続けていたのだ。

「田畑の下にかつての城下町があることは昔から分かっていたわけですが、その全貌が明らかになったのは、昭和42年から始まった本格的な発掘調査の結果でした」（東村市長）

復原町並のスタッフは中世の風俗を体現

発掘調査は大規模なものとなり、最終的に278haが国の特別史跡となった。さらに遺跡内の主要庭園4つが特別名勝に指定され、遺跡からの出土品2343点が重要文化財に指定され、現在に至っている。また平成7年には県の事業として武家屋敷、職人の家屋などが並ぶ中世の町並みが約200mの道路とともに復原され、多くの観光客を集めるようになった。

「復原された町並みはありますが、一乗谷全域を眺め渡すと、まさに一乗谷プロジェクトの『なにもない』というコピーの意味を理解していただけると思います」

実際に一乗谷を訪れると、この「なにもない」空間が、いかに贅沢（ぜいたく）な空間であるかが分かるだろう。当時の建物は門などを除けば何一つない。逆に現代を感じさせる何物もない。ただひたすら中世の町並みをしのばせる礎石や庭園跡が、山間の広大な空間にがらんと展開しているだけなのだが、その「なにもなさ」が訪れる者の歴史的想像力を大いにかきたてくれる。特別史跡・名勝・重要文化財のトリプル指定を受けた全国5カ所の物件で、建物などのいわゆる「物」がほとんどない史跡は一乗谷朝倉氏遺跡だけなのだ。

この一乗谷朝倉氏遺跡への観光入込客数は、平成21年度には約54万人、さらに翌22年度には約72万人、翌23年度には約94万人と、近年大幅に増加している。一乗谷プロジェクトの効果が大きいわけだが、そもそもの発端は、平成21年6月7日に、一乗谷朝倉氏遺跡を式典会場に、天皇、皇后両陛下をお迎えして開催された「第60回全国植樹祭」だろう。トリプル指定の遺構を全国に発信するきっかけとなり、観光入込客数が増加し始めた。

福井藩主・松平家の別邸を再現した養浩館庭園

さらに一乗谷プロジェクトと同時期に展開され、相乗効果的に話題を高めた、一乗谷を舞台に撮影されたソフトバンクモバイルのテレビCM（平成22年冬、同23年6月放映）の存在も見逃せない。一乗谷はCMキャラクター「白戸家の犬のお父さんの故郷」という設定がなされ、一乗谷朝倉氏遺跡のネームバリューはお茶の間にまで広まった。

「一乗谷プロジェクトおよびソフトバンクCMの元々の仕掛けをしたのは、実は、本市の観光アドバイザーの安野敏彦さんです」（東村市長）

安野氏はANAの宣伝部長を長年務めた後、家族で福井市に帰郷。その際に福井市の発展のために役立つことがあれば声を掛けてほしいと福井市に申し出たことを契機に、平成20年7月から福井市観光開発室所管の観光アドバイザーに就任。その豊富な人脈を駆使して高名なディレクター2人を招聘（しょうへい）するなど、まず前述の一乗谷プロジェクトの陣頭指揮を執った。さらにそのディレクターが以前から手掛けていたソフトバンクCMにもつながっていったのだ。

福井から三国港（坂井市）行き、勝山（勝山市）行きが出ている「えちぜん鉄道」は、広域観光にも不可欠で、車内乗務を務める"女性アテンダント"が乗客に好評

一種のブーム現象を引き起こしつつある一乗谷への注目度を軸に、福井市では現在、「まちなか・一乗谷・海岸線」を回遊コースとしてネットした観光戦略を実施している。まちなかの代表的な観光ポイントとしては、一乗谷の朝倉氏が滅亡した後に現在の中心市街地に城（北の庄城）を構え、領地支配した織田信長の重臣・柴田勝家関連の史跡や、江戸時代の福井藩主・松平家の別邸を再現した養浩館庭園を中心とする歴史散歩コースが挙げられる。また海岸線は風景美が知られる越前海岸一帯が観光ポイントで、特に冬季には越前がにと水仙の花を目的に来る観光客が多い。これらの回遊性を高めるため、路面電車も含めて市内に4本走る鉄道網（越美北線・えちぜん鉄道2路線・福井鉄道＝路面電車）や、バス交通などを駆使して、まちなか・一乗谷・海岸線をネットしようというのが、観光戦略の骨子だ。

冬の味覚の王者・越前がに

福井の冬の定番スイーツ・水ようかん

今や福井のソウルフードの一つとされるソースカツ丼

福井駅周辺整備および西口再開発事業の今後

「まちなか観光に関しては、さらに現在進めている福井駅周辺の包括的な整備事業、特に建物の老朽化などが進む駅西口中央地区の再開発事業が完成すれば、より一層の効果が期待されてきます。福井駅西口中央地区市街地再開発事業（以下、駅西口再開発事業）は平成14年ぐらいから構想が持ち上がり、現在に至っている長年の懸案事項で、さまざまな紆余（うよ）曲折を経てきた経緯があります。しかし、北陸新幹線の金沢～敦賀間の開業がいよいよ平成37年をめどにするという具体的な目標が

昨年、国の方から打ち出されましたので、これまで動きの鈍かった再開発事業にもようやく拍車が掛かり始めました」（東村市長）

福井駅周辺の整備事業はＪＲ福井駅そのものの連続立体交差事業を中心とする整備事業（実施主体・福井県）と、鉄道の高架化に合わせた駅周辺土地区画整理事業（同・福井市）、さらに駅西口再開発事業（同・福井市）がほぼ同時進行で行われてきた。

駅の高架化は将来的な北陸新幹線開通への準備の意味合いもあるが、これらの大きな事業が現在、同時進行で行われている背景には福井市の戦後の歩みが凝縮しているともいえる。

特に昔から中心市街地を形成していた福井駅の西口側一帯は、第二次大戦の終戦間際に連合軍の絨毯（じゅうたん）爆撃を受け、都市機能がいったん壊滅している。さらに戦後すぐの昭和23年にはＭ7・1の福井大震災（福井県全体で死者3728人、福井市だけで死者913人）に襲われ、準備の進みつつあった都市計画は再び壊滅した。

中心市街地に賑わいを創出する市民公募型事業「まちなか活性化交流イベント事業」

ちなみにこの戦災および震災では、市内中心部の主だった史跡もほとんど壊滅した。手つかずの状態で出土した一乗谷朝倉氏遺跡への市民の思い入れは、だから余計に強いものがあるのかもしれない。

それはともかく――。その後も豪雪や大水害などの自然災害に幾度も見舞われ、つい最近では「平成16年7月豪雨」が記憶に新しい福井市だが、現在の都市基盤は昭和23年の震災後にこつこつと蓄積されてきたものが中心になっている。戦後も70年が経過しようとしている現在、福井市の中心市街地の古い建物は軒並み築60年前後になろうとしているのだ。もちろん新しいビルディングもあるが、ことに駅前に関しては、面的な意味で包括的に再整備された経緯がない。

今春、導入される最新型の次世代型低床車両（ＬＲＶ）県民投票に基づき配色デザインが決定された（合成写真）

さらに平成10年前後からは大型駐車場を持つ巨大モールなどの進出が大和田地区などの郊外に集中するようになり、商業地区としての中心市街地の地盤沈下は加速度化する。前述したように平成14～15年から駅西口再開発事業の構想が、紆余曲折を経ながらも長年の懸案として粘り強く推移してきた背景には、そうした危機的理由もある。しかし、「来る来るといわれて、なかなか来なかった北陸新幹線・金沢～敦賀間の開通のめどがようやく立った」（東村市長）ことも追い風になり、昨年12月には「福井駅西口全体空間デザイン基本方針」および「福井駅西口中央地区市街地再開発事業における市施設の基本方針」がいよいよ策定された。

『ふくい』魅力発信のシンボル空間“福井駅西口全体空間デザイン図”（平成28年春工事完了予定）

新中心市街地の「にぎわい交流拠点＝ランドマーク」としての再開発ビルおよび周辺の屋根付き広場（全天候型で、にぎわいの中心としてのパサージュ的空間）の建築デザイン、さらには再開発ビルを構成する内容についても、プラネタリウム（ドームシアター）を核とする自然科学学習施設や多目的ホール、観光関連施設、総合ボランティアセンターなどの設置が決まった。これらの建設計画は今年春の設計確定、秋の着工を経て、平成28年春には竣工の予定だ。

良い部分を伸ばすためのまちづくり

市長の言葉にもあったように、福井市の駅周辺整備事業は観光戦略とも大いに関連してくるが、それだけではない。交流人口の増大によるにぎわいの創出とともに「これからのまちづくりは、地域に不足しているものを補うだけでなく、地域の良いところを伸ばすためのまちづくりという発想も大事です」と東村市長は強調する。

和気あいあいの雰囲気で進む小学校でのＡＬＴ授業風景

例えば福井市は、小中学校レベルの学力が全国トップクラスにある。福井は近世以前から人材輩出県といわれてきた伝統があるが、それは今も健在なのだ。

福井市ではさらに、これからの国際化社会に通用する次世代を育成するため、県内に勤務するＡＬＴ（英語指導助手）と市内中学生が泊まり掛けで行う「英語サマーキャンプ」の実施や、ＡＬＴおよびＦＣＡ（友好都市のフラトン市から招聘した文化交流大使）を小学校に派遣するなどして、小学校3年生から中学校3年生までの「生きた英語教育」を実施している。

福井市のストロングポイントの一つである、小中学生の学力レベルをさらに幅広いものとするためにも、「国際化社会におけるコミュニケーション能力の育成に役立つ生きた英語教育」が効果的に働くことは容易に想像できる。こうした土壌をさらに、駅周辺再整備を軸にした中心市街地の再生、新たなまちづくりと連動させ、地域の良いところを伸ばす起爆剤にするという意味では「再開発ビルへのプラネタリウム設置は外せないポイントだと考えていた」と東村市長は言う。英語によるコミュニケーション力の育成は、日本人社会においてももちろん有効に働く。そこへさらにプラネタリウムの積極的な活用で、子どもたちの理科離れを防ぎたいというのが東村市長の願いの一つなのだ。

戦災と震災で、かつて一乗谷と同様「なにもなくなった」福井の中心市街地は今、地域のさまざまな願いと理想を包含しつつ大きな一歩を記そうとしている。北陸新幹線が福井駅にも停車する予定の平成37年には、駅前を中心とするまちなかや一乗谷、海岸線およびその周辺地域に生き生きとしたにぎわいを形成している様子が、今から目に浮かんでくるようだ。

（取材・文　遠藤　隆）

ふくい春まつり「越前時代行列」は福井に春の到来を告げる風物詩